

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 313

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.1381 天使の微笑みのリズム\_The Rhythm of a Smile of an Angel

---

## 目次

- 6241. 映画生活に向けて
- 6242. 今朝方の夢
- 6243. 現代の徴兵制度/引き出すこととしての抽象化について
- 6244. ズヴォレの移民局に向けて
- 6245. 今朝方の夢
- 6246. 新たな滞在許可証を入手して/新たな専門領域・実践領域の確立に向けて
- 6247. かかりつけの美容師かつ友人のメルヴィンとの対話より
- 6248. 野菜の天日干しをしての驚き/映画・ドキュメンタリー評論の探究と実践
- 6249. 政治への関心/トットナム・ホットスパーを取り上げたドキュメンタリー
- 6250. 今朝方の夢
- 6251. 音楽の乱れ/自己作品化としての創作活動
- 6252. 水の大切さと有り難さ/今朝方の夢
- 6253. 動画サービスの比較/二宮尊徳とシュタイナーの経済思想
- 6254. 『アンダン ～時を超える者～』を視聴して/今朝方の夢
- 6255. "This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第1話を視聴して
- 6256. 協働の意義/ "less is more"の発想と余白/呪いと祝福
- 6257. 来月の対談講演会に向けて/今朝方の夢
- 6258. 一時帰国に際して/種々のメタ理論について
- 6259. 『野火 (Fires on the Plain )』を見て
- 6260. "This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第3話を見て

---

## 6241. 映画生活に向けて

時刻は午前6時に近づきつつある。この時間帯はまだ真っ暗であり、そして肌寒い。最近、早朝の肌寒さが特に増している。今はなんとか寝室と書斎の窓を開けることができているが、これから寒さが厳しくなってくると、換気する時間が短くなってしまいうだろう。

今の外気は8度なので、確かに寒い。あと少ししたら日本への一時帰国の時期を迎えるため、日本の気温を確かめてみた。東京に関して言えば、東京の最低気温がこちらの最高気温ぐらいであるため、その温度差には気をつけたいと思う。

昨日、動きに関する哲学書を読んでいた。それを読みながら、動きたいという衝動は、探求の要求事項そのものであることを思った。思考空間上、物理空間上における動きたいという衝動を自然な形で受け入れ、それを表現していくことは自己探求と自己涵養をもたらす。今後はなお一層のこと、動きを大事にしていく。生命としての自己は絶えず動いていて、動きの中で深まっていく。人生もまたそうである。

日本から帰ってきてから引っ越しをしようと考えているが、引っ越しもまた文字通りの動きの一種であり、それを経て自己がまた変化していくだろう。日本から戻ってきて引っ越しを完了するまでは、少しばり学術書を離れ、読むとしても音楽理論や作曲理論に関する書籍だけにしようかと思う。仮にその他の書籍を読んだとしても、引っ越しを終えるまでは新しい書籍を購入することは控え、手持ちの書籍を何度も繰り返し読んでいくことにしたい。

先月に大量注文した書籍と合わせて、手持ちの書籍を再読することを並行して行っていたのだが、そこから得るものが非常に多かった。新しい物件が決まったにも関わらず、書籍の注文のタイミングで登録していた過去の住所に書籍が届けられることを防ぐために、オランダに戻ってきてからはしばらく書籍の購入を控えよう。もちろん、引っ越しのタイミングがもう少し先になるのであれば、そのタイミングを見計って、購入予定文献の書籍を購入してもいい。ここ最近では毎月色々と良い書籍を見つける。それと同じように、引っ越しするに値する良い物件が見つかって欲しいと思う。

日本に滞在中には、映画館に行って映画でもみようかと思う。書物からの学びだけではなく、映画を通しての学びを求め始めている自分がある。映画もまた、自己探求と自己涵養をもたらしてくれ

---

---

る。日本からオランダに戻ってきてからは、作曲実践の量をもう少し増やし、1日に1本ほど映画を見るような生活をしばらく送ってみようかと思う。午前中は創作活動に集中し、午後から夕方にかけては映画を見るような生活である。書物以外から、学びと実践の手口を求めているのかもしれない、それを行うことによって、また新しい発見がもたらされ、自己の世界が広がっていくように思える。フ  
ローニンゲン:2020/9/21(月)06:02

## 6242. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今日から新しい週を迎えた。新しい週の始まりに希望を思い、進歩を思う。今週もまた非常に充実した週になるに違いない。そこには平穏さがあり、同時に変化があり、進歩がある。それら全てをゆっくりと味わっていこう。そうすれば、それらはさらに深まりをもたらすだろう。

それでは、今朝方の夢について振り返り、早朝の創作活動と読書に打ち込んでいこうと思う。今日の読書は、DK出版の図鑑をまず3冊ほど読む。それぞれ、食、脳、体に関するものだ。それらを読み終えれば、積読状態の本はもうなくなる。明日からはロイ・バスカーの一連の書籍を再読し始めようと思う。もう一度14冊ほどのバスカーの書籍を読むことによって、随分と理解が深まるだろう。

夢の中で私は、市民体育館のような場所において、セミナーを受けていた。会場には椅子や机はなく、セミナー参加者はフロアに座って講師の話を聞いていた。講師は2人いて、1人は大学時代の知り合いだった。彼は別の大学を卒業しているのだが、偶然知り合いの知り合いとして大学2年生の時に知り合った。

彼が主にセミナーの司会役を務めていて、あるところで私と目が合い、突然私に質問をしてきた。質問を受けて立ち上がると、私は自分がオーダーメイドのスーツを着ていることに気がついた。そのスーツは一般的なビジネスマンが着るようなものではなく、随分とお洒落なスーツだった。

私が立ち上がると、彼は質問を述べた。質問の内容として、過去にセミナーをしている時に、感動して泣いたことはあるか？というものだった。その場には、ちょうど協働者の方がいて、その方と昨年セミナーを開催した時に、参加者の方からの質問に回答する中で、感極まって思わず涙を流してしまうことがあった。その時の話を私はすることにした。

---

---

手元のマイクの調子が悪いのか、私の声が会場全体に聞こえていないかもしれないということを心配した。というのも、私の回答の後半から、会場がにわかになぎわつき始めたからである。私はなんとか最後まで話をし、再びフロアに座した。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、小中学校時代の親友(FK)と友人(YK)が現れた。親友は天井を見上げるかのようにして仰向けになって寝転がっていた。そこに友人が彼に対して何かちょっかいをし始めた。そのような光景を眺めていると、私の体は東京の街の大通りにあった。そこは車の行き来が激しく、空気はお世辞にも綺麗とは言えなかった。

ちょうど私の横には、サッカー元日本代表の名選手がいて、その方は長くヨーロッパで活躍をしていたので、ヨーロッパの空気が綺麗な街について色々話をしていた。お互いの結論として、空気が綺麗な場所に住むに限るということ話をしていた。私たちを構成し、私たちを機能させてくれるのは、食と空気なのだということを再度確認し合った。

最後の夢の場面では、ある有名なユーチューバーの方が経営する店にいた。そこではオーガニックな食品や小物が売られていた。その方と私は年齢が近く、関心領域も重なるものが多分にあっただので、店の中で話が盛り上がった。ダークチョコレートを購入しようと私は思っていて、それを探した。私の横にはその方が付き添ってくれていて、色々とお勧めのチョコレートについて教えてもらった。1つ良さそうなものを見つけたので、それを購入しようと思った。

すると、どういうわけか、チョコレートコーナーの近くにあった、足のかかたが浮かないようにするソールを勧められた。その方がまず履いてみて、その良さを私に伝えてくれた。そこで私も履いてみることにしたが、なかなかうまく履けなかった。どうやら工夫がいるらしく、それを教えてもらってようやく履けた。

すると、店の中にJポップが流れていることに気づき、私はその音楽に合わせて、広い店内をまるでフィギアスケートでもするかのように滑走し始めた。不思議なことに、自分の靴がスケート靴のようなものに変形していたこともあって、店内を滑ることができたのである。店内を一周している時に、別のコーナーに2人ほど友人がいて、滑りながら彼らに声を掛け、再び元の場所に戻ってきた。すると、ユーチューバーのその方は、今ご自身で試されていることを時系列データにしてiPad上で管理をし

---

ていた。それを見て、その方の科学者マインドに幾分敬意を表し、自分も同じようなことを日々行っていると伝えた。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/9/21(月)06:27

#### 6243. 現代の徴兵制度/引き出すこととしての抽象化について

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今、雲一つない夕方の空に夕日が沈んでいこうとしている。

今日は午前中に、韓国の兵役について調べていた。南北朝鮮は、依然として休戦状態であるということを改めて知る。両国は戦争を止めたのではなく、休戦であるという現状を見る。韓国や北朝鮮だけではなく、シンガポールやマレーシア、タイなどにも依然として徴兵制度が残っている。ヨーロッパに目を向けてみると、将来の移住先として考えているフィンランドにも兵役義務がある。

フィンランドの兵役義務は韓国よりも短いが、依然としてそのような制度が残っていることになんとも言えない気持ちになる。世界はまだ兵役が存在している程度の成熟度合いなのだとことを思い知る。日本には軍事的な徴兵制はないが、“recruit(兵隊を募る)”という言葉に由来した企業社会へのリクルーティングがある。それは経済的な意味での徴兵制とほぼ何ら変わりがないだろう。

アテネで盗まれたオランダの居住許可証の再発行の受諾の通知を待っていたのだが、再発行依頼から1ヶ月以上経ったので、移民局のウェブサイトを通じてマイページにログインしたところ、無事に9/10に再発行の受諾がなされていたことを知った。正式に移民局からの手紙が届くのが少し遅れているようだが、一安心した。

日本人であれば滞在許可無しでオランダには最大3ヶ月間滞在できるし、入国にはビザがいらない。そうしたことから、仮に来月の日本への一時帰国の前に新しい滞在許可証を受け取ることができなかったとしても問題はなかったかもしれないが、入国審査官に色々説明するのが面倒だったので、安堵感を覚える。

移民局からの通知を手紙で受け取るタイミングも考えて、ズヴォレの移民局に行くタイミングは来月の初旬にしようと思う。いつもズヴォレの移民局に行く時には、せっかくなのでズヴォレの美術館に足を運ぶようにしている。今回何か面白い企画がやっているのであれば足を運んでみようと思う。

---

抽象化するというのは引き出すことである点について考える。言葉を通じて体験を書き留めることも、様々な程度や次元はあれどやはり抽象化であり、それはこの世界から何かを引き出すことなのだと思う。自分の内的宇宙からある特定の事柄を引き出すこととしての言葉を通じての抽象化。そして、それは絵や音を通じても行っていきたいことである。

今日もまた創作活動と読書に打ち込む1日だった。明日からは、ロイ・バスカーの書籍を一気に読み返していく。合計で14冊ほどの再読も、ここ最近の読書のペースだとあつという間に終わるかもしれない。そしたら3回目の読書を考えてもいい。

夕食前の入浴中に、今後映画鑑賞とどのように付き合っていくかを考えていた。学術書の読書からまた少し意図的に離れている間に、映画を通じて学びと実践の糸口を得ていこうと考えていることについては昨日の日記に書き留めた通りである。1日の中で映画を見るタイミングとどのように見るかということについてももう少し考えてみようと思う。フローニンゲン:2020/9/21(月) 19:40

#### 6244. ズヴォレの移民局に向けて

時刻は午前5時を迎えた。4時半に起床した時、とても良い目覚めであり、今日1日が充実したものになると予感できた。

昨日、移民局のウェブサイトを確認し、滞在許可証の受け取りの予約をしようと思った。本来は葉書が到着してから予約をするのだが、ウェブサイト上ですでに許可証の受け取り予約ができると記載されていたので、早速10月初旬の日程を調べてみた。すると、すでに初旬から中旬にかけて日程が埋まっていて、空いているのは10/22以降となっていた。その時はすでに日本に滞在中であり、困ったなと思った。以前もそうしたことがあり、移民局に電話をしたところ、ウェブサイト上の受付枠と実際の枠は異なるらしく、その場で予約ができたことを思い出した。明日に移民局に電話をしようと思った時に、ふと9月の予定表を眺めた。

すると、明日だけが空いていて、時間帯を調べると、午前中の枠が全て空いていることに気づいたのである。ちょうど明日の午前中は何も予定がなかったのも、ここに予約を入れるしかないと思って早速午前11時の枠を予約した。そのようなことが昨夜にあった。ということで、今日は午前中からズ

---

ヴォレの移民局に出かける。移民局の予約が11時からであり、調べると、フローニンゲン駅を9:48発、ズヴォレ駅10:45着の列車があったので、それに乗って移民局に向かうことにした。

移民局までの道のりはもう随分と知ったものであり、歩いて10分もかからない。昨日の日記に書き留めていたように、いつもは移民局に立ち寄った帰りに街の美術館に足を運ぶのだが、今日は午後から散髪の予定があるので、早々とフローニンゲンに戻ることにする。かかりつけの美容師のメルヴィンの店に行くのが午後2時ということもあり、移民局に行って帰ってくると自宅に戻る時間はなさそうなので、そのままメルヴィンの店に立ち寄ろう。自宅からはりんご一個と水を持っていき、フローニンゲン駅に向かう前に、朝9時からやっているオーガニックスーパーに立ち寄って、昼食用の軽食として、プロテインが豊富なクラッカーでも購入しようかと思う。

余裕を持ってフローニンゲン駅に到着したら、往復の切符を購入して、駅構内のカフェで温かいコーヒーで購入しようと思う。フローニンゲンからズヴォレまでは2駅、時間として1時間弱だ。前回列車に乗ったのはアテネ旅行の時なので、久しぶりにフローニンゲンの外に出ていくことは良い気分転換になるだろう。

昨日ふと、今後は土日のどちらかを週1回のファスティングの日にしてみるのもいいかもしれないと思った。毎日の食事が本当に軽くなり、それによって身体も心も随分と軽くなったのだが、週に1日は胃腸を完全に休めるとより良い状態になっていくのではないかと思った。とりあえず、毎回の旅行と同じく、日本への一時帰国からオランダに戻ってきたらまた数日間のファスティングを行う。その後、週1日のファスティングを習慣にしてみようかと思う。今のところ、回復食の都合上、日曜日よりも土曜日が良さそうかと思う。フローニンゲン:2020/9/22(火)05:27

#### 6245. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。この時間帯はまだ真っ暗であり、気温も低い。今の気温は8度とのことだ。幸いにも今日は晴天であり、日中は22度まで気温が上がるので、日中は暖かくなる。ズヴォレに向かって自宅を出発する時は気温が今とほとんど変わらず10度以下のようなので、何か羽織るものを持っていこうと思う。



---

それでは今朝方の夢について振り返り、自宅を出発するまでの時間はいつものように創作活動と読書に時間を充てたい。今日は列車移動もあるので、自宅にいる間は、読書よりも創作活動により時間を充てよう。もちろん、列車の中でも少しばかり曲を作りたいと思う。往復のそれぞれで1曲ずつ作り、あとは読書の時間に充てるか、それとも列車に乗っている間の時間は全て作曲に充て、移民局で待っている時やフローニンゲンに帰ってきて、髪を切る時間までの間にどこかで読書でもしようかと思う。

夢の中で私は、数年前に大流行した日本のアニメ映画の主題歌を歌ったグループの人たちと行動を共にしていた。特に私は、ボーカルの男性と意気投合していた。彼らと市民会館のような場所において、話しながら各フロアを回っていた。上の方の階で用事を済ませた後、1階にある有名な画家の方の作品が展示されているとのことだったので、その方の作品を見に行くことにした。1階に到着し、遠方にその方の作品たちが見えた。

私たちがそこに向かっていくと、途中で一般人の人たちがそのボーカルの人の存在に気づき始めた。そのボーカルの方はもう慣れているのか、平然とした表情で引き続き歩いていた。そういえば先ほどその方が、今回の新曲はもう随分と前に作られたものであり、どのようにすれば人気が出るのかのマーケティングを徹底的に考え抜いたと述べていたことを思い出した。そのようなことを思い出しながら、ふと近くのテーブルを見ると、そこに大学時代のゼミの友人たちがいた。

彼らは試験に向けて熱心に勉強をしているようであり、私の存在に気づくと、勉強しなくていいのかという眼差しをこちらに向けていた。しかし私は、自分は勉強しなくても大丈夫だと思っていた。とはいえ、仮にその授業の単位を落としたら卒業できるのかについては考えていた。残り何単位取る必要があるのかを考えた時、保険として来学期はもう少し授業を取った方がいいように思えたし、その授業の試験に向けて勉強を少ししようかと思った。

今朝方はそのような夢を見ていた。実際のところは、もう少し場面があったように思う。特に、歌手の人とより密な言葉のやり取りがあったように思う。また、市民会館のような建物の上の階での出来事もいくつか場面があり、さらにはその前にも何か別の夢を見ていたように思う。フローニンゲン：

2020/9/22(火)05:49

---

## 6246. 新たな滞在許可証を入手して/新たな専門領域・実践領域の確立に向けて

時刻は午後4時を迎えた。つい先ほど、かかりつけの美容師のメルヴィンの店から帰ってきた。その前に、本日の午前の出来事から少し振り返りをおきたい。

今日は朝の9時前に自宅を出発し、移民局のあるズヴォレに向かった。アテネ旅行に出掛けた7月末よりも列車には人がいたが、相変わらずまだマスクをしていた。以前、もう公共交通機関でマスクを着用しなくなったかもしれないということを述べていたが、まだマスクを着用しなければいけないようだった。

ズヴォレの街に到着した時はまだ肌寒さがあった。移民局に到着すると、ほぼ待たずに自分の番となり、無事に新しい滞在許可証を得ることができた。念のため、期限を確認すると、現在の滞在許可の期限は来年の8月14日とのことであり、来年の夏には再び滞在延長の申請をする必要がある。今度の申請は最初の申請よりも楽なようであり、今度の申請によって滞在許可は4年間か5年間ほど有効だったように思う。

いずれにせよ、次回の滞在許可が降りた後、2年ほど経ったらオランダ永住権と欧州永住権の申請資格が得られる。幸いにも、2つ目の修士課程はオランダ語で修了したことになっているため、オランダ永住権の取得の際に、オランダ語の試験が免除される。これはすでに移民局の人に直接確認したことであり、オランダ語の試験が免除されることは本当に有り難い。もちろん、起業家ビザを更新し続けていくというのも1つの方法だが、それだと居住可能な場所が基本的にオランダに限られてしまう。

今のところ私は、欧州永住権の取得後に、フィンランドで生活をしようと思っている。もちろん、ここから人生がどのように動いていくのかは未知であり、居住地については考えが変わることもある。オランダとフィンランドの2国に生活拠点を設けることも考えられるし、両国以外の場所に住むことも考えられる。いずれにせよ、欧州永住権は居住の自由をもたらしてくれるだろう。

無事に滞在許可証を得ることができ、移民局を出た時の時刻を確認すると、移民局に滞在していたのはわずか10分かそこらだった。今日はズヴォレの街の美術館に行くことはせず、すぐにフロー

---

ニンゲンに引き返すことにした。行きの列車の中では2曲ほど曲を作り、論文を1本読んだ。帰りの列車の中でも1曲ほど作り、また別の論文を1本ほど読んだ。

持参したロイ・バスカーの哲学書ではなく、デスクトップ上に保存していた論文を読みたい気持ちが突如として現れたので、それに純粹に従うことにした。読み進めていた論文は、映画と社会学に関するものと、シュタイナーの経済思想に関するものである。

昨日の日記に引き続き、映画について考えていることを書き留めておきたい。映画との向き合い方に関して、幾分突飛な考えが降ってきた。端的には、映画・ドキュメンタリー評論を自分の新たな専門領域にし、映画・ドキュメンタリー評論を通じた実践に従事していこうという考えが芽生えたのである。

映画とドキュメンタリーは、人間性と社会の種々の側面を理解する上でまたとない題材である。日常生活を覆う精神的抑圧構造、政治経済の問題、環境問題等々を映画とドキュメンタリーを通じて紐解いていくことに強い関心がある。発達学、教育学、インテグラル理論などのこれまでの自分の専門領域に加え、社会学、哲学、霊性学、美学などを通じて、多様な学術的観点から映画とドキュメンタリーを視聴していくことをこれから行っていく。それは1つの実践であり、それに並行して専門書を通じた学習を旺盛に行っていく。

数日前に、日本に一時帰国した際にオランダに持って帰る和書の中に、映画評論関係の書籍をいくつか購入していた。今新たに6冊ほど興味深い映画評論の専門書を見つけ、それらも購入して実家で受け取らせてもらおうかと思う。英語空間上における映画評論の専門書は、取り急ぎ、21冊ほど興味深いものを見つけ、購入予定の文献リストに付け加えた。今のところ、上記の学術分野以外として、精神分析学、文化人類学などの学術領域の観点から映画を紐解いていくことにも関心があり、個別具体的な思想家としては、ヨルゲン・ハーバマスやロイ・バスカーに着目し、彼らの思想的枠組みを映画を鑑賞してみようかと思う。

単に娯楽として映画を楽しむだけでなく、社会変革を志向する社会実践的な映画・ドキュメンタリー評論を新たな専門・実践領域としてこれから確立していこう。ここからは映画やドキュメンタリーを可能な限り毎日見ていこうと思う。その際には、見た映画やドキュメンタリーのタイトルと日付を記録

---

し、短くてもいいので感想や考察を書き留めておこうと思う。こうした小さな実践が、映画から汲み取れるものをより豊かにし、社会変革につながる日々の実践をより深いものにしてくれるだろう。フローニンゲン:2020/9/22(火)16:33

#### 6247. かかりつけの美容師かつ友人のメルヴィンとの対話より

時刻は午後4時半を迎えた。今、フローニンゲンの気温は20度を超えており、西日が差している。

先ほど街の中心部から帰ってくる時に感じていたことなのだが、もう午後の日差しは秋のそれである。夏のように強い日差しはそこになく、その優しさは完全に秋のそれなのだ。

太陽の日差しからも秋を感じることができる。いよいよこの季節がやってきたかと思った。ここから自己を深めていく季節が始まるのだ。

北欧に近いオランダの秋と冬。それはとても長く、それは自己を根底から涵養する「優しい厳しさ」がある。そこには実存的な優しさと厳しさの双方があるのだ。それを味わうのは今年で5度目である。この人生において、あと何回これを経験するのだろうか。願わくば、今後一生涯を通じてこの優しさと厳しさを通過していきたい。それを通過するたびごとに、もう自分は違う自分になっている。言い換えれば、私は毎年死と再生を繰り返しているのである。

「死と再生」。それは本日のメルヴィンとの会話でも取り上げた話題である。かかりつけの美容師かつ友人でもある彼との対話はいつも刺激と洞察に満ちていて、とても貴重な機会である。

今日はズヴォレの移民局からフローニンゲンにすぐ戻ってきて、街の中心部のオーガニックスーパーで買い物をした後に、雑貨屋に立ち寄った。そこでラベンダーの香りのするアロマキャンドルを書斎用と寝室用に2本購入し、チャッカマンを購入した。これまでは芳香剤を部屋に置いていたのだが、揺らめく炎の光を夜に見て落ち着いたかったこともあり、これからは芳香剤ではなく、アロマキャンドルを使うことにした。アロマキャンドルも奥深い領域であり、これもまた1つの趣味の世界として探究を深めていってもいいかもしれないと思う。

---

雑貨屋を後にしたときの時刻はメルヴィンの店に行くには随分と早かったが、店のソファで待たせてもらおうかと思い、1時間弱早い時間帯にメルヴィンの店に足を運んだ。店の扉を開けると、店には客はおらず、メルヴィンはパソコンを通じて何かを見ながら昼食を食べているところだった。

メルヴィンはいつものように私を歓待してくれ、挨拶を済ませてから、私は彼に何を見ていたのかを尋ねた。どうやらメルヴィンは、クロアチアの量子物理学者が霊性の世界を量子物理学の観点から解説している動画を見ていたようだ。それは興味深かったので、少し話を聞き、そこからはいつものように多岐に渡る話をした。

前回、メルヴィンがボルダリングで足を痛めた時に、私が霊気を彼の足に施し、その後の状態に関する話や、最近メルヴィンの周りに起こっている種々のシンクロシティの話、彼の霊力の向上に関する話、メルヴィンと彼の彼女であるスシが先日スロヴェニアに旅行に行った話などをしてきた。そうした話の中で、「死と再生」という話題が挙がっていたのである。ここ最近には私にも諸々のシンクロシティが起きていて、今回も偶然ながら、メルヴィンがフローニンゲンの郊外に引っ越しを考えているということを述べた時に、私も引っ越しを考えているということを話した。それもまた偶然であり、お互いにより静かな環境を求めているようだった。

本日のメルヴィンとの対話を通じて、改めてメルヴィンがヘレナ・ブラヴァツキーのように思えてきた。先日、ブラヴァツキーに関するドキュメンタリーを見た際に、彼女の叡智が瞑想実践を通じた直感的知覚からもたらされたものであることを改めて知った。メルヴィンは確かに書物からも叡智を得ているようだが、彼はブラヴァツキー的な形で叡智を超越的世界から汲み取っている。今日改めてメルヴィンの眼を見た時に、第三の眼が先月よりも開発されていて、それについてフィードバックすると、本人もそれを強く自覚しているようだった。

先月から今月にかけて、メルヴィンは6日間のファスティングをしていて、それもまた第三の眼の開発につながっているようだった。今日のメルヴィンは明らかに先月とは異なっていて、先月は霊力が迸るような状態だったが、今日のメルヴィンはそこから一山超えて、霊力の迸りを経た後の平穏さを携えていた動から静に向かったというよりも、動と静を超越した状態にいるのではないかということについてもこちらから言及し、メルヴィンもそうした非二元的状態を経験しているということを述べてい

---

た。先客がいなかったこともあり、今日は1時間ほどコーヒーを飲みながらソファに腰掛けてメルヴィンと対話をし、そこからさらに1時間を髪を切ってもらいながら対話をした。

メルヴィンとの対話には治癒的・変容的な力があり、メルヴィンがソクラテスに言及してある話題について話した後に、こちらから、ソクラテスはかつて対話を魂の世話としての実践であると述べていたことを共有した。メルヴィンとの2時間の対話はあっという間に過ぎ去り、気がつけばさっぱりとした髪になっていた。

メルヴィン:「これにて日本に行く準備が整ったね」

私:「これでもう完璧だよ。今日もありがとう」

次回の散髪は日本から戻ってきた翌週であり、次回に話をする時までには、お互いの人生においてまた変化が見られるであろうという点、そしてお互いの実存的・霊的な力がより一層高まっているであろうという点について述べてから握手を交わし、店を後にした。フローニンゲン:2020/9/22(火)  
17:00

#### 6248. 野菜の天日干しをしての驚き/映画・ドキュメンタリー評論の探究と実践

時刻は午後7時半を迎えた。今、薄紫色の夕焼け空を拝むことができている。

先ほど夕食を食べた時に、とても驚いたことがあった。昨日父より、キノコの天日干しだけではなく、白菜以外の葉物野菜を除いた野菜を天日干しすると、水分が抜けて旨味が凝縮し、栄養素が桁違いに上がると聞いたので早速試してみたところ、本当に驚くほど旨味が出た。

毎日食べている椎茸に加えて、トマト、ニンジン、玉ねぎ、ジャガイモ、ニンニクを天日干しして今朝方出かけ、十分に日光を浴びたそれらの野菜は本当に美味であった。特にトマトは、甘味が見違えるほどに増し、果物であるかのように感じたほどだった。

父のメールを読んだ後に、自分でもインターネットを通じて色々と調べたところ、基本的にはほとんどの野菜は天日干しすることによって旨味が増し、栄養価が高まるとのことだった。ブロッコリーも天日

---

干しできるようだが、天日干しすぎると苦味が強くなってしまうようなので、明日からはブロッコリーを除いた野菜を天日干ししたいと思う。偶然ながら、昨日、シベリウスのように自分の畑を持って、そこで野菜や果物を育てたいと思っていた。そのような思いが湧いてきたのは、食に関する図鑑を読んでいた時のことだった。

その後、生態系や環境に関する図鑑を読んでいた時に、畑を持って野菜や果物を栽培すれば、より一層環境に対する意識が高まりそうだと思った。酸性雨や土壤汚染の問題などは、自分が育てる畑にとって死活問題であり、そこで取れる野菜や果物にとっても密接に関わる問題だ。そこから環境と政治経済の関係性を含め、関心の輪がさらに広がっていくことが想像できた。

父は実家のバルコニーで野菜や果物、ハーブ類などを育てており、その写真が昨日のメールに添付されていた。昨年も野菜や果物の栽培について少しばかり父から聞いており、依然として関心は強い。今すぐにではないが、いつか自分で野菜や果物などを育てたいと思う。

今夜はこれからメールの返信をし、映画やドキュメンタリーを社会学、政治学、哲学から解説している日本語の専門書をいくつか購入し、実家宛に送ってもらおうと思う。専門書のみならず、論文もインターネット上で探してみよう。現在の関心は社会学、政治学、哲学から映画を鑑賞していくことだが、とりあえず様々な観点から映画を捉えていくという意味で、実家にある辻邦生先生の映画評論はオランダに持ち帰ってきてもいいかもしれない。実家に到着し、中身をパラパラとめくってみて、オランダに持ち帰るべきかを判断したい。

映画・ドキュメンタリー評論を自分の新たな専門分野にするという考えが突如として芽生えたことに驚く。しかしながら、今日のメルヴィンとの会話の中でも出てきたように、自分が真に変化を遂げていけば、関心や探究の幅が広がり、新たな挑戦をしていくのが自然だろう。それは学習や実践における有機的なプロセスにおいて起こる自然なことなのだ。

これからは、創作活動と映画・ドキュメンタリー鑑賞を中核に据えた生活をしていこう。近い将来、数年間はそれだけに特化した生活を送ってみるのもいいだろう創作活動と映画・ドキュメンタリー評論を通じて社会と関わっていく生き方。どちらも現代人や現代社会への建設的な批判的眼差しを

---

持って行き、それが社会変革に結びつくような実践として行う。フローニンゲン:2020/9/22(火)  
19:57

#### 6249. 政治への関心/トットナム・ホットスパーを取り上げたドキュメンタリー

時刻は午前6時を迎えた。今朝の起床はゆったりと5時半だった。

昨日は、ズヴォレの移民局に行き、午後には美容室に行っていたこともあり、仮眠を取ることはなかったが、1日の終わりまで集中力を持って自分の取り組みに従事できていたように思う。今日は、一瞬一生の会の第2期の第5回目のクラスがあり、その後、オンラインミーティングが1件ほどある。ちょうどその2つの間が1時間ほど空いているので、その時に仮眠を取ろうかと思う。

昨日ふと、政治に関して黙ってはいられないという気持ちになった。とりわけ、日本の政治事情に対する問題意識が突如として強くなった。そのきっかけについては複合的な要因であるため、いちいちそれについて書き留めることはしないが、いずれにせよ、日本の政治に強く関心を持ち始めたということである。調べてみると、非居住者にも選挙権があるようであり、届出をして投票行動に出ているかと思った。日本の内部にいるのとは違う形で、国の外にいるからこそ日本の惨状が至るところで見聞きできるようになった。

政治は経済や教育に多大な影響を及ぼし、国民の健康や安全とも密接につながっている。ここからは政治についても深く学習をしていき、真つ当な政治家を支援するための投票行動に乗り出していこう。政治の基礎知識を学習し、あとは個別具体的な政治的現状や政策を見ていながら、政治に参画していく。

確か、オランダの永住権を取得すれば、それは市民権の取得を意味するため、外国人であっても政治に参加できるのではなかったかと思う。フローニンゲン大学に在籍していた時、オランダ人の友人たちが政治にかなり関心を持っていて、誰でも政治についてある程度の知識を持っていることに驚いた。それは男女年齢問わずである。おそらくこのあたりもオランダでは教育がしっかりなされているのだと思う。政治に関心を持てるような、そして政治の基礎を教える教育があるからこそ、彼らは政治の基礎知識を持った上で政治に関心を持っているのだろう。



---

ここからしばらくはオランダで生活をしていきたいと思っているため、オランダ永住権の取得後に選挙権が与えられるのであれば、オランダの政治にも参画していこうと思う。そうすることによって、日蘭の政治事情を比較することができるだろう。

ちょうど先日、政治学に関する図鑑のような書籍を購入し、その初読を終えた。ここからもう一度その書籍を読み返し、あとは今具体的に起こっている政治的問題や取り上げられている政策を見ていくことにしたい。

先日から一昨日にかけて、英国プレミアリーグの強豪サッカーチームのトットナム・ホットスパーを取り上げた9話にわたるドキュメンタリーを見ていた。これまで、サッカーチームを取り上げた映画や1話完結のドキュメンタリーなどがあつたが(例:リバプールの「イスタンブールの奇跡」を描いたものなど)、1話1時間弱のものが9話に及ぶ長編ドキュメンタリーはこれまでなかったように思う。プロサッカーチームの組織運営や内情について理解する上で、このドキュメンタリーは面白かった。選手や監督の心の機微も色々と察することができ、そしてサッカーチームが1つの有機体であることを改めて確認し、経営の難しさもまた見えてきた。そうした意味で、自分の世界をまた少し広げてくれるような作品だった。フローニンゲン:2020/9/23(水)06:36

## 6250. 今朝方の夢

時刻は午前7時に近づきつつある。今、空がダークブルーに変わり始めた。サマータイムが終了するのは来月の最終日曜日であり、その時はもう自分は日本にいる。

昨日、アロマキャンドルを購入し、早速寝る30分ぐらい前に書斎と寝室の置いたそれに火を灯した。揺らめく火をしばらく眺め、ラベンダーの香りを楽しんでから火を消し、就寝に向かった。今朝も起床してすぐに書斎のアロマキャンドルに火を灯した。これからは毎朝毎晩アロマキャンドルに火を灯し、寛ぎの中で1日を始め、1日を終わっていききたいと思う。

自分があることを考え、あることを感じる時、世界は自己にそのような体験的的局面を提示しているのではないかと昨日思った。あることを考え、あることを感じる人間がいなければ、世界にはそのような体験的的局面が存在しなかったことになる。この世界は自分を通して何かを語らしめようとしていること。この世界は自分を通して何かを表現させようとしていること。そうしたことを考えると、なお一層の

---

---

こと言葉・音・絵を通じて表現活動に励んでいこうという思いが強くなる。この思いもまた、この世界から自己に投げかけられたものなのだ。今日もそうした思いを大切にし、それを体現した1日にしていく。

夢もまた、自分に何かしらの体験的局面を提示してくれるものなのだろう。今朝方は夢の中で、私は大きな図書館にいた。その図書館には本棚で囲まれた雰囲気の良いセミナールームがあった。そこで私は、参加者の1人1人が自分の物語を紡ぎ出すワークショップを開催していた。参加者はみんな日本人であり、全員が成人であった。高齢者はいなかったが、かなり年配の人たちも参加していた。

私はまず、日本の国民的アニメの1つを取り上げ、参加者各人に好きなキャラクターを選んでもらい、そのキャラクターのどのような点が好きなのかを考えてもらい、紙に書き出してもらった。その後、過去の自分の成功体験や最も嬉しかったことを思い出してもらい、それをもたらしてくれた個人の内面外面要因、そして集合の内面外面要因を考えてもらうことにした。

最後に、アニメのキャラクターの好きな点に関する物語と、自分の成功体験あるいは最も嬉しかった体験に関する物語の2つを統合し、大きな物語を作ってもらうことを参加者に促した。参加者全員が見事にそれを行い、これまで分離していた2つの物語から1つの統合的な物語を紡ぎ出すことによって、治癒と変容を体験しているようだった。これはとても好評なワークショップであった。

次の夢の場面では、小中高時代から付き合いのある親友(SI)の家に私は遊びに行った。彼の家、ないしは彼の部屋は不思議な空間にあった。それは迷宮のような建築物の最上階にあったのである。うねった建物の中を歩き回っていると、途中で小中高時代の別の友人(YU)と出会い、彼とその場で立ち話をした。最上階に向かえば向かうほど、辺りは不気味なほどに静まり返ってきて、人の気配が感じられなかった。

いよいよ最上階に到達した時、そこに広がっていたのは彼の部屋ではなく、神社の本殿だった。その本殿はとても開放的であったが、それほど神聖なエネルギーを感じることはなかった。ふと私の横を見ると、そこには小中学校時代のまた別の友人(SH)がいて、これから彼と協力して、襲いか

---

かって来る悪い坊主たちを倒すことになった。友人と組み、悪い坊主たちを一蹴したところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2020/9/23(水)07:07

### 6251. 音楽の乱れ/自己作品化としての創作活動

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今から2時間前ぐらいに、天気予報の通り、激しい雨が降った。それは本当に激しい通り雨であり、地上の全てを押し流してしまうかのような力があつた。少なくとも私にはそのように感じられた。ひるがえって、今はとても穏やかな世界が広がっている。あいにく空には雲がかかっているため、夕日を見ることはできないが、静けさがあることは確かだ。振り返ってみれば、今日もまた非常に充実した1日だった。

生命の流れとしてのメロディー、あるいは内的感覚の流れとしてのメロディーについて考えている。孔子はかつて、音楽の乱れは社会の乱れであると指摘した。個人の内側に流れる音楽が乱れている時、それは自分の世界の何かが乱れているのだ。それは身体的な次元の乱れかもしれないし、精神的な次元の乱れかもしれない。はたまた、その両者かもしれない。いずれにせよ、個人の内側と社会の内側に流れている音楽的なものに敏感になっていき、それが乱れていないかを確認することは大切だろう。

自己作品化としての創作活動について考える。創作活動は、自己の内的感覚を形にするゆえに、それは自己作品化とでも形容できるような営みである。実際に、自分が作り出す1つの小さな曲の中に、自己のフラクタルを見ることができる。それだけではなく、自己を超えた巨大な超越的なものもまたそこにフラクタルとして顕現している。端的には、自分が作る1つの小さな作品は、小宇宙と大宇宙のフラクタルとしての現れなのである。

昨夜、映画を社会学や政治学の観点から取り上げている専門書を8冊ほど見つけた。昨夜の調査では、あえて和書を調べていて、今回一時帰国した際にそれらを読みたいと思ったのである。ちょうど数日前に、すでに何冊か書籍を注文して実家に送ってもらうことにしているが、新たなに8冊を研究のために購入しようと思う。購入に際して、母にもう8冊ほど書籍が届くことを伝えておこう。

映画やドキュメンタリーの鑑賞を通じて、人々を呪縛しているバイオパワーやカテゴリー化の所在を明らかにし、それらの変容とそれらからの解放を促す道を探っていきたい。それらはこれまでの自

---

分のアプローチにはないものであるが、それに向かわせるものが自分の内側にある。映画やドキュメンタリーの鑑賞と分析を通じて、個人や社会の中に蔓延る病理的信念体系や病理的ディスコースの特定と治癒・変容を行っていくこと。それは自らの新しい実践として自分を呼んでいる。フローニンゲン:2020/9/23(水)19:37

### 6252. 水の大切さと有り難さ/今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。起床した瞬間に雨音が聞こえたかのように思えたが、目覚めた時には雨が降っていなかった。天気予報を見ると、しかしここから1時間半ほど小雨が降るかもしれないとのことである。そこからは晴れとなるようなので、今日も野菜の天日干しをしよう。

父から野菜の天日干しについて教えてもらうことができ本当に良かったと思う。ただでさえ栄養価の高いオーガニック野菜たちが、太陽の光を浴びることによってさらに栄養価を高め、旨味を増す姿を見ると、なんだか嬉しくなってしまう。人と同じく、生命が持っている潜在能力を真に発揮することの尊さを知る。

「経済的利益のために熱帯雨林を破壊することは、飯を食うためにルネサンス期の絵画を燃やすようなものである」という生物学者のエドワード・ウィルソンの指摘をふと思い出す。環境学や生態学への関心の高まり。野菜や果物を育てることへの関心。映画やドキュメンタリーに対する関心。自分の中で関心領域がどんどん広がっていく。それはなぜなのだろうと考えてみたときに、おそらく自分がこの世界で真に生きているからそうしたことが起こるのだと思った。自己が解放と自由を享受する方向に向かえば向かうだけ、関心領域が広がっていくことは自然な現象なのだと思う。

昨夜、午後9時を過ぎた段階で、突如として水道から水が出なくなった。どうやら水道工事のようだった。そこでふと、先日、水道工事に関するオランダ語の通知が郵便受けに入っていたことを思い出した。そういえば、毎年一回水道工事、あるいは水質確認が行われているような気がしており、この国はそれだけ水を大切にしている国なのだろうかと思った。

ちょうど数日前に、私たちの生活や生命維持において水は不可欠であり、水を取り巻く政治経済的な問題について調査をしようと思って、“Blue Gold: The Fight to Stop the Corporate Theft of the World’s Water”という書籍を購入予定文献リストに加えていたところだった。

---

現在、水はもう経済的搾取の対象に成り果ててしまっていて、良質な水が飲めることに関しても格差が今後拡大してしまうかもしれない——それはもう始まっているだろう——。またそもそも、生態学的な観点からすると、この地球から良質な水がどんどん失われてしまう危険性もある。水道工事が夜中に完了することを祈りながら、水の大切さとその有り難さを思うような夜だった。

今朝方はそれほど印象に残る夢を見ていなかった。だが感覚としては、喜びの感情が湧くような夢だったことは確かだ。具体的に覚えていることと言えば、私は選挙権が付与され、これから政治に参画していく機会が得られて喜んでいるようだった。その喜びの感情は強く、夢の中の私は笑顔だった。覚えているのはそれくらいだろうか。起床した瞬間には、もう少し夢について覚えていたような気がする。夢の場面についてそれほど思い出すことができなかつたとしても、夢の中で感じていた肯定的な感覚は今もまだ自分の内側に残っている。フローニンゲン:2020/9/24(木)06:02

### 6253. 動画サービスの比較/二宮尊徳とシュタイナーの経済思想

時刻は午後8時に近づこうとしている。辺りは随分と暗くなっており、真っ暗になるのはもう間近である。数日前に購入したアロマキャンドルに火を灯すのは朝と夜の楽しみになった。寝室のものに関しては、就寝の30分前に火を灯すようにしている。今、書斎のアロマキャンドルの炎の揺らめきを眺めている。

数日前に、映画とドキュメンタリーを社会学、政治学、哲学の観点から観賞していくことを新たな楽しみに加えたいということを書いていたように思う。これまでは、オランダのアマゾンプライムを使っていて、それは配送料が無料になるという観点から今後も使っていこうと思うが、動画のコンテンツの量と質について考えてみたときに、NetflixかU-NEXTにも加入しようかと考え始めた。そこで両者について調べてみたところ、オリジナル作品であれば前者に軍配が上がるが、映画(洋画・邦画)に関しては、U-NEXTの方がNetfliよりも多く、アニメに関しても同様に、U-NEXTの方がコンテンツが充実しているようだ。それを知り、近々U-NEXTに加入しようかと思う。

それによって、これから本格的に映画とドキュメンタリーを見ていくことができるようになるだろう。映画鑑賞に際して、政治学と社会学の語彙と観点を増やしたいと思ったので、両者に関して、ちょうどオックスフォード大学出版から辞書的な専門書“The Concise Oxford Dictionary of Politics”と“A

---

Dictionary of Sociology”が出版されていることを本日知り、それらは日本からオランダに戻ってきてから購入しようと思う。それらの辞書と合わせて、個別具体的な思想家としては、今のところロイ・バスカーやヨルゲン・ハーバマスの思想的枠組みを活用して映画やドキュメンタリーを紐解いていこうかと考えている。

今日の振り返りをしておくと、今日は社会学の観点から映画批評を行っている論文を読み、シュタイナーの経済思想に関する論文を読んだ。後者の論文の中で、二宮尊徳とシュタイナーの経済思想の共通点が言及されていて、それを興味深く思った。

「道徳を忘れた経済は害悪である。しかし、経済を忘れた道徳は寝言である」という二宮尊徳の言葉が印象的であり、現代の道徳観は前者の通りになってしまっており、経済については後者の通りになってしまっているという状況だろう。両者の分離を乗り越え、それらを統合する道についてぼんやりと考えを巡らしていた。明日もまた引き続き、社会学の観点から映画批評を行っている論考を読み進めていこう。それに加えて、ロイ・バスカーの一連の書籍の再読も進めていく。明日もまた充実した1日になるに違いない。フローニンゲン:2020/9/24(木)20:09

#### 6254.『アンダン ～時を超える者～』を視聴して/今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。今、ゆっくりと空がダークブルーに変わり始めている。今日の最高気温は15度、最低気温は6度とのことであり、ここ最近の中では寒い方である。

昨日、『アンダン ～時を超える者～』(原題: Undone)というアメリカのアニメーションドラマの全てのエピソードを視聴し終えた。この作品は、Amazonプライム初のオリジナルアニメシリーズとのことである。この作品は、以前視聴した『ゴッホ 最期の手紙』を彷彿させるようなアニメーション技術が使われているのだろうかと思って調べたところ、少し異なるようだ。『ゴッホ 最期の手紙』では、実際の油絵をアニメーション技術で動かしていくような形で制作されていたのに対して、『アンダン ～時を超える者～』では、もちろん絵も活用しながらも、実際の役者の動きをカメラで撮影してトレースするというロスコープという技術が用いられていることを知った。作中の登場人物の表情や動きがリアルなものに感じられたのは、この技術のおかげだろう。

---

この作品が主題として扱うリアリティの可変性について少しばかり考えさせられる。作中で描かれていた描写と似たような知覚体験をこれまで何度かしたことがある自分にとって、改めてリアリティとは何なのかについて考えさせられてしまう。ふとしたときに、このリアリティから別のリアリティに移り、そのリアリティが今このリアリティになるような体験が思い出される。

主人公のアンマの特殊能力は、亡くなった父以外の人たちには理解されず、幻覚や妄想を見て、突飛な思考や行動をもたらす統合失調症(schizophrenia)とみなされていた。そうした状況を見て、アンマは実際に時空を超えて、様々なリアリティを行き来できる能力があるのではと思った一方で、現代人は大なり小なり、誰もが統合失調症的な特性を持っているのではと思わされた。厳密には、現代人は幻想や妄想に縛られる形で日々を生きているという点において統合失調症的であり、同時に無自覚に種々の反復的行動をしているという点において神経症的なのではないかと思われる。この作品から汲み取れることはまだたくさんあるかと思われるので、少し時間を空けて再度考えを巡らしてみよう。

今朝方の夢について少し振り返っている。夢の中で私は、小中学校時代の親友3人(NK & HS & SI)とサッカーをして遊んでいた。4人でパス交換をして遊んでいる中で、私はいくつかの種類のキックを織り混ぜて、近くにいた2、3人の女性友達にキックの仕方を教えていた。

そこから場面が変わり、今度は別の2人(AF & YU)と一緒に、川辺で木のボートに本を積んでいくことを行っていた。結構な重さの本を、ボートが沈まないように適度に載せていくことを3人で行った後、気づけば私はボートの上にあった。しかしそのボートには本は積まれておらず、私の横には父がいた。どうやら私は、以前にボートの操作方法を父から教えてもらっていたようなのだが、それをすっかり忘れてしまい、危うく激流に流されるところだった。なんとかボートを川の中の巨大な石の近辺で止めることができ、命が助かった。父曰く、その川の深さは19mで大したことはないと言っていたが、私は2mを超えたらもう十分に深いだらうと思っていた。その川は、どこか見覚えのある川のように思えた。フローニンゲン:2020/9/25(金)07:15

#### 6255. "This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第1話を視聴して

時刻は午前7時半を迎えた。今、西の空に夕日が沈んでいく姿を拝んでいる。

---

今朝方にふと、引っ越しをするのは12月の頭ではなく、年末にしようと思った。まもなく日本への一時帰国があり、オランダに戻ってくるのが11月の初旬であるため、日本にいる間に物件を探すのではなく、オランダに戻ってきてから物件を探す方がより時間をかけて物件を選ぶことができるかと思った。もちろん、自分の望む条件に合致するような良い物件がなければ無理に引っ越しをすることはないが、登録しているウェブサイトから比較的頻繁に条件に合致した物件がメールで通知されてきている。そうしたこともあり、可能であれば年末に引っ越しをし、新年を新居で祝おうと思う。当初はマヨルカ島で年末年始を過ごそうかと思っていたが、コロナが完全に終息したわけではなく、さらには引っ越しを行いたいこともあるので、マヨルカ島に行くのはまた来年以降にしようと思う。

本日から、“This Giant Beast That is the Global Economy (2019)”というAmazonプライムオリジナルのドキュメンタリー作品を視聴している。これは地下経済の様々な現象や仕組みを取り上げている興味深い作品である。第1話においてはマネーロンダリングが取り上げられ、租税回避行為に関する一連の機密文書である「パナマ文書」の舞台裏を垣間見ることができたり、マネーロンダリング対策をしていた元FBI捜査官のインタビュー、そしてドキュメンタリー作品の主人公が実際にマネーロンダリングを行うためにキプロスでペーパーカンパニーを作ろうと試みるという興味深い場面もある。

特にその場面において、キプロスの起業斡旋業者の発言が印象に残っている。主人公が、「起業資金が汚れた金(人身売買、核兵器の売買、ドラッグの売買によって得られた金)だった場合でも起業支援をするのか？」というような質問を投げかけると、その斡旋業者は、「その質問を尋ねられるまで考えたこともなかった」と笑いながら答えた。仮にそれが本当であったとしても、そしてそれが嘘であったとしても、マネーロンダリングを斡旋するようなことが自然と行われている点に構造的な問題があるように思えた。斡旋業者たちにとってみれば、マネーロンダリングは日常のことであり――2013年以降からキプロスにおける規制は厳しくなったらしいが――、そうした状況が彼らの倫理観を含めた感覚を麻痺させているように思えたのである。

エピソードの後半に、マネーロンダリングを一掃しようとする、金融システムが成り立たなくなってしまうという構造的な問題についても言及されており、ますます現代の病理的な経済システムの姿が浮き彫りになってくる。金融・経済のこうした制度的な歪みが、それに関わる人々の感覚を麻痺させ、それに関わらない人にも直接・間接的な害を与える流れが見えてくる。



---

先ほどから第2話を見始めており、第2話においてはビジネスリーダーとサイコパスについて前半で取り上げており、後半はドバイの経済・社会状況が取り上げられている。続きを明日見ることにし、また何か考えさせられることがあれば書き留めておこうと思う。

しばらくは海外のテレビドラマや日本のアニメを見るのではなく、ドキュメンタリー番組や映画を中心に視聴していこうと思う。今後はドキュメンタリーや映画をより多様な観点で紐解いていきたいと思うため、取り急ぎ、ケンブリッジ大学出版、オックスフォード大学出版、ルートリッジ出版からそれぞれ出版されている、政治学、社会学、哲学、心理学の本格的な辞典をそれぞれ購入しようと思う。吟味をした結果どれも良さそうであれば、3つの出版社から4つの分野に関する辞典の全てを購入し、それらを参照しながらドキュメンタリー番組や映画を視聴していこうと思う。フローニンゲン:2020/9/25(金)19:47

#### 6256. 協働の意義/ "less is more"の発想と余白/呪いと祝福

時刻は午後8時を迎えようとしている。まだかろうじて日が沈んでおらず、辺りには明るさが残っている。とは言え、もう随分と日が沈むのが早くなったものである。

今日は正午前に、現在協働中の方々とオンラインミーティングを行った。その前半には、シンガポールオフィスのシンガポール人の方と話をし、彼女と組織美学について話し合った。今後、その方が組織美学に関してどのような研究と実践をしていくのかとても関心がある。

早いもので、その協働者の方々とのお付き合いは丸2年が経ち、年々関係が深まり、研究と実践がより幅広く、そしてより深いものになっていることを実感する。ここからは、さらに深く成人発達理論を起業家の育成支援に活用していくより実践的な形でプロジェクトを進めていく方向になった。これまでの2年間はどちらかというと基礎研究のフェーズであり、ここからがより実践的なフェーズになる。

以前から思っていることではあるが、こうした形で様々な関係者の方たちとの協働がなければ、学術的な知識が単なる机上の知識で終わってしまっていたら。また何よりも、人間や組織の成長・発達に関して、広く深い実践知を得ることができなかったであろうと思われる。

---

現在、それぞれ異なる領域でいくつかの組織と協働させてもらっており、協働者の方たちとのやり取りが自分の関心と実践を幅広く、そして深いものにしていてくれるように実感する。ここからも自分1人で行う諸々の取り組みに加えて、様々な関係者の方々と協働を続けていこうと思う。

午後にふと、“more is more”の発想ではなく、“less is more”の発想で、内面世界に創造性と発達のための余白を作っていくことの大切さについて考えていた。前者の発想では、決してそうした余白が生まれにくい。前者の発想は、むしろ貴重な余白を無駄なもの、あるいは空虚なもので埋めてしまうことをもたらす。この現代社会は私たちに前者の発想を半ば強制的に仕向けてくる。そうした強制力に気づき、そしてそうした力を産むメカニズムについて自覚的になる必要があるだろう。

自らの人生における重大な経験が、後々の経験を規定する可能性について考えていた。確かに私たちは未知の世界に開かれており、自由意志に裏打ちされた様々な選択をすることは可能だが、そうした自由意志すらも規定してしまうような重大な経験というものがあるように思える。端的には、それは私たちを呪縛する呪いのようなものでもあり、同時に祝福のようなものでもある。

私たちの存在は、開かれながらにして閉じているということ。逆に、閉じながらにして開かれているとも言えるだろう。どちらであったとしても、自分の全経験を方向付けるような呪いが、人生の何かしらの重大な経験によってもたらされてしまう可能性があるということに自覚する。そうした経験は、善意の他者や悪意の他者からもたらされるかもしれない。はたまた、善意も悪意もない社会によってもたらされるかもしれない。偶発的にもたらされるそうした経験が自己をこれ以上もないほどに呪縛することの中に人間として生きることの不条理さを見る。フローニンゲン:2020/9/25(金)20:03

#### 6257. 来月の対談講演会に向けて/今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今日から週末を迎える。今日もまたいつもと変わらず、自分の取り組みを前に進めていこう。午前中は特に創作活動と読書に集中していく。

今日の午後は、日本に一時帰国した際に行う対談講演会に向けての資料作りに励んでいこうと思う。この講演会に向けての資料はすでにアイデアがいくつも湧いており、それが湧き上がってくる都度、ワードファイルに書き留めていた。今日はそれをもとにして、PPT資料を作っていこうと思う。対談の時間は2時間であり、質疑応答などの時間を30分ぐらい取る予定なので、それを考慮した分量

---

---

の資料を作っていく。こうした資料作りもまた自分にとっては創作活動でもあるので、創作を楽しんでいこうと思う。

今日の進み具合によるが、明日は午後から何かしらの映画を見てもいいかもしれない。昨日から視聴しているドキュメンタリーの続きを見ていくのではなく、明日はいったんそこから離れ、何か映画を見ることも検討する。映画を見る視点や汲み取れるものをこれから少しずつ増やしていきたい。そのようなことを考えながら書籍を調べていると、社会学、政治学、哲学、心理学の観点から映画を扱っている専門書を、今のところ35冊ほど見つけた。

先日映画の社会学的考察を行っている和書を10冊弱購入したので、それらと合わせて洋書で35冊ほど専門書を読んでいけば、映画を見る視点の幅と深さが随分と変化するだろう。来年以降は、創作活動と映画・ドキュメンタリー鑑賞により時間を充てるような日々を送っていければと思う。

年々関心領域が拡張されていき、実践領域が増えていく。それは自己がゆっくりと深まっていることの証だろうか。自己の発達の土壌が少しずつ肥沃なものになってきているのを実感する。そうした大地に、天から降ってきた種を植えていこう。自分の関心はそうした天の恵みのようなものである。そして植えられた種もまた、天の恵みのような様々な出来事や関係性を通じて育てていこうと思う。

今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、実際に通った中学校の教室にいた。そこは、中学校3年生のときに使っていた教室であった。その日は快晴であり、暑くも寒くもなく、秋というよりも春の雰囲気を感じさせるような日であった。時間帯は朝であり、春の優しい朝日が教室に差していた。

私は教室の窓際の1番前の席に座っていた。授業の始まる直前だったため、もうみんな席に座っていた。すると、教室に1人の女性の先生が入ってきた。見ると、小学校のときにお世話になっていた個人塾の先生だった。

先生はにこやかに教室に入ってきたが、教壇に立つと、教壇の上の机に文章が大きく書かれたオブジェのようなものが置かれていて、先生はそれを見て顔をしかめた。そのオブジェに書かれていた文章は、先生の授業と関係のあるものではなく、生徒に向けた単なる連絡事項であり、確かにそのようなものが机の上に置いてあると、邪魔であり、あまり気分がいいとは言えないだろうと思った。

---

---

すると私の体は、教室の外にあり、階段を上っている最中だった。私の左横には、小中高時代の1人の友人(SN)がいた。そして彼の後ろには、同じく小中高時代の女性友達(KF)がいた。その男性の友人が私に、教室の前の廊下に面白いものがあると述べた。それは何だろうと気になりながら階段を上り、教室の廊下に辿り着くと、そこには先日行われた模擬試験の結果が張り出されていた。

見ると、私は学年で1番の成績のようだった。学年で1番であるだけでなく、全国でも上位の成績のようであり、教室に到着すると、担任の先生がそれを祝ってくれた。しかし、自分の机の上に置かれていた模擬試験の結果を冷静になって眺めてみると、数学は学年で1番だったが、国語が8番であることに少し不満であった。

そこは中学校だったのだが、その模擬試験はどういうわけか大学入試に関するものであり、第一志望に関してA判定だった。しかしその判定結果についてもあまり信用しておらず、これから何をどのように勉強していこうかと考えている自分がいた。私は、模擬試験を含め、学校でなされている教育に窮屈さと理不尽さを感じ、早くこのゲームから抜け出さないと自分の人生が台無しになってしまうと思っていた。フローニンゲン:2020/9/26(土)06:10

#### 6258. 一時帰国に際して/種々のメタ理論について

時刻は午前6時を迎えた。今の気温は6度と肌寒く、今日から1週間のフローニンゲンは、ヘルシンキよりも気温が低いことを知って驚いた。

早いもので、再来週の水曜日に日本へ一時帰国するのだが、オランダに戻ってくる11月初旬はもう相当に寒いだろうということが予想される。去年の今頃は、ちょうど日本に到着した頃であり、その時はまだ日本は暑く、日中は半袖で過ごせるほどだった。一方で、日本に向かってオランダを出発した朝にはもう冬用のジャケットとマフラーをしていたように思う。そう考えると、今年は去年よりもまだ暖かいのかもしれない。

再来週の水曜日に自宅を出発するときマフラーが必要かどうかを判断するというよりも、そこから4週間弱の日本の滞在を踏まえ、11月初旬のオランダの気候を考えてマフラーを持参するかを考える必要がある。それはもう考えるまでもなく、マフラーは持っていった方がいい。ただし、あまり余計

---

なものを持っていきたくはないので、タートルネックの服とジャケットを羽織れば、なんとか寒さを凌げるかもしれない。今回はスキポール空港と関空の直通便を使うため、乗り換えがないのは諸々の意味で楽である。当初は、ヘルシンキを経由してアムステルダムに戻ってくる予定であり、それであれば空港近くのホテルに2泊ほどし、到着の翌日に市内の美術館を巡って、その翌日にフローニンゲンに帰ろうかと思っていた。

今回は移動の疲れがなく、アムステルダムに到着するのが午後3時過ぎであるから、そこからフローニンゲンに戻っても問題ないように思える。やはり1番寛げるのは自宅であり、近々日本にいる友人や知人がアムステルダムに遊びにきたときに美術館を巡ることもあるだろうから、今回はアムステルダムに滞在することなしに素直にフローニンゲンに戻って来ようかと思う。そのようなことを昨夜考えていた。

昨日は改めて、現代のメタ理論の比較研究に関する専門書を読み返していた。メタ理論が果たすべき役割の1つとして、規範性に対する規範性の確立を行っていくことがあるであろうと考えていた。つまり、とりわけそのメタ理論が対象とする領域における既存の規範性を検証し、必要であればそれらを刷新していくことが少なくともメタ理論には求められる。

メタ理論は、単なる知識の整理をするために活用されるものではないのだ。ケン・ウィルバーのインテグラル理論、ロイ・バスカーの批判的实在論、エドガー・モリンの複雑性思考は、メタ規範性として機能するようなメタ理論に該当すると言えるだろう。それらは、それぞれ異なる領域の規範性のメタ的な検証と刷新の役割を果たす。いずれのメタ理論も固有のシャドー領域と脆弱な箇所がある。もちろん、それぞれのメタ理論は自身の理論的枠組みに対するシャドワークを行う力が備わっているが、固有のシャドーそのものを生み出す構造そのものを完全に治癒することはできない。そしてそこにこそ、そのメタ理論の強みや価値があるとも言えるだろう。メタ的な批判をし、メタ的な新たな物語を創造していくこと。

インテグラル理論はメタ理論の中でも、メタ物語の創造に軸を置いており、批判的实在論はメタ批判に軸を置いている。前者はセラピーの技法や心理学的な理論に基づく1人称的解放からの世界の解放に焦点が当てられており、後者は社会学・政治学的な理論と実践に基づく2人称的解放からの世界の解放に焦点が当てられている。もちろん、どちらのメタ理論も諸々の学術領域を参照して

---

いるが、それぞれがどこに最も力点を置いているかの違いは上述の点にあるだろう。再読をしている書籍の中でも同様の指摘がなされている。今日の午前中の読書では、バスカーの書籍を2冊ほど再読できればと思う。フローニンゲン:2020/9/26(土)06:35

### 6259.『野火(Fires on the Plain)』を見て

時刻は午後7時を迎えた。土曜日がゆっくり終わりに近づいている。

今日は午後に、U-NEXTを契約し、早速映画を見た。これまでは映画を見るとしても洋画を見るが多かったが、今日は『野火(Fires on the Plain)』という塚本晋也監督の映画を見た。この作品の原作は大岡昇平の小説であり、第2次世界大戦末期のフィリピン・レイテ島を舞台にした物語である。とりわけ本作品では、日本軍の敗戦が色濃くなった中、日本兵がそこでいかに過酷な状況を生きていたかを描いている。

映画は、塚本晋也監督演じる田村一等兵の視点で進行していく。戦争の過酷な状況における人間の脆さや弱さなどについてここであえて言及するのではなく、本作で印象的だった点を書き留めておきたい。私が注目したのは、レイテ島の中で自動機関銃のようなもので日本兵が次々と殺されていく中で、奇跡的に助かった主人公の視線の先にあった一本の植物が映し出されたシーンである。このシーンを見たとき、人間世界とは別の世界が存在しているということをまざまざと見せつけられたように思えた。

私たちが生きている時空間とはまるっきり異なる時空間が確かにあって、その1つとして動植物の世界があるように思えたのである。また、殺されていく人間が死の世界の描写なら、その植物は生の世界の描写であり、それら両方の世界の間中に位置している、あるいはそれらを超越した世界もあることを示唆するようなシーンだった。

それと少し似た観点としては、レイテ島の中で兵士たちは明日も分からぬ極限状態の中で協力し合ったり、騙し合ったりしながら生きている一方で、ふとした時に大自然や大空の描写が描かれていることも印象的だった。そこに、天と地の対比を見た。地上で行われていることとは全く関係なしに存在している天の世界があるということ。そして、ひょっとしたら、天は常に私たちを見ているということを示唆するような描写のようにも思えた。

---

---

一体どれほどの現代人にこの感覚があるだろうか。天が見ているという感覚を神話的合理性段階のそれとして受け止めるのではなく、合理性段階を超え、超越的な段階のそれとしてそうした感覚を持つことは大切なのではないかと思った。それはきっと、高度な道徳観や倫理観の礎になる感覚だろう。

その他にも印象に残っている点がある。最終的に主人公は生き残り、無事に日本に帰った。彼以外のほとんどの日本兵は死に絶え、彼がどうして生き残れたのかについても考えていた。それはもちろん運もあったであろうが、何か別のところにあるように思えたのである。作品の中でも、愛する人が日本にいる点について言及されていたが、それは他の多くの日本兵においてもそうであろう。そうなってくると、愛する人への愛以外の何かは彼を生存に導いたのではないかと考えていた。

そのようなことを考えていると、そう言えば主人公が他の兵隊と会話をしているときに、「日本では何をしていたんだ？」という質問に対して、「ものを書いていました。本を読んで、ものを書くことをやっていた」ということを述べていたことを思い出したのである。主人公を最後まで人間として支え、生存のための大きな拠り所になっていたのは文学という芸術の力なのではないかと思ったのである。繰り返しになるが、それは楽観的な見方かもしれないが、彼が文学を愛し、文学から何かを得ることによって、他の兵隊とは異なる形で精神を涵養していた点は見逃せないように思う。

主人公はひょっとすると、自ら文学を読み、文学を創作するという芸術活動を通じて、超越的な世界に参入する経験を積み、それが天が見守っているという感覚を最後まで主人公にもたらし、人間としての自己を保持することを可能にしたのではないかと思ったのである。戦争から日本に帰ってきた主人公は、精神的・身体的な障害を患っているように思えたが、それでも人間として世界に戻ってきたことは確かであり、そこからまた小説を執筆する行動に駆り立てられていたことも印象に残っている。

ここからしばらくは、Amazonプライムのドキュメンタリーを見ていくことに並行して、午後に時間を取って、U-NEXTを通じて映画を見ていきたいと思う。邦画の良さを改めて見直しているところなので、しばらく邦画を見ていこうと思う。明日は、『日本のいちばん長い夏』か『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程』を見たい。フローニンゲン:2020/9/26(土) 19:44

---

## 6260. “This Giant Beast That is the Global Economy (2019)”の第3話を見て

時刻は午後8時に近づこうとしている。もう辺りは随分と暗い。今日は気温も低かったこともあり、秋も随分深まり、もう冬の足音が聞こえてくるほどだ。

本日U-NEXTを契約したことに伴い、これから少しずつではあるが、本格的に映画やドキュメンタリーから学びを深めていき、この世界に対してこれまでとは違った形で関与していこうと思う。できれば毎日映画を1本見たいところだが、それができない日もあるだろう。無理に毎日映画を見るのではなく、映画を見たいというある種の飢餓感を大切に、それなりに吟味をして面白そうだった映画を見ていこうと思う。片っ端から映画を見ていくのではなく、自分が関心を持っている主題を中心に映画を選定していく。もちろん、これまでの自分の関心の外にあったのだが、ふと気になってしまうような主題やジャンルの映画も見たい。それによって、自分の内面宇宙がまた拡張していくだろう。

AmazonプライムとU-NEXTを併用していけば、随分と多くの映画やドキュメンタリーを見ることができよう。もちろん、どちらも海外ドラマが充実しており、後者に関しては日本のアニメが非常に従事しているので、引き続き海外ドラマや日本のアニメも楽しみながらにしてそこから学びを得たい。書物から得られるものは多大であるが、映画、ドキュメンタリー、ドラマ、アニメから得られるものも多大であると感じている。

先ほど夕食を食べながらふと手を止めてしまうことがあった。それは、自分の中にある考えが去来したからである。それは何かというと、今後何かのきっかけで、母国に入国することができなくなってしまうこともあり得るのではないかという考えだった。今回の一時帰国はまさにその縮小版のような体験に思えた。

非居住者の私は、日本の空港に着いたら検査を受け、そこから移動を含め、そこからいろいろな制限を受ける。今後、コロナ以上に重大な出来事が日本や世界を襲い、それによって今後2度と母国の大地に足を踏み入れることができなくなってしまうことも十分にあり得ることを思ったのである。一寸先に闇があり、一寸先に光があること。そして一寸先には、闇も光もない世界がありうるということ。それについて考えていた。



---

昨日から視聴し始めた”This Giant Beast That is the Global Economy (2019)”の第3話を本日見た。第3話は、天然ゴムにまつわる話だった。本エピソードではまず、木々から作られる天然ゴムが私たちの生活と経済をどれだけ支えているかを紹介している。その後、ゴムの木の病気が経済を崩壊させ、私たちの生活に大きな影響を与えることについて触れられていた。

印象的だったのは、天然ゴムの供給先が寡占状態になっており、供給先の多様性を確保しなければ、発生しうる木々の病気によって現在の供給先が潰れてしまうことによって、世界が一変してしまう危険性を指摘していたことである。さらには、ゴムの木の生産者は低賃金で働いていて、その問題をゴム工場の責任だとしていたが、ゴム工場の責任者は、ゴムという先物市場に参加しているディーラーたちに問題があると指摘し、彼らディーラーは世界経済の変動性に問題があるとしてきていた。

この問題の堂々巡りには思わず苦笑いが出てしまったが、問題の種類と深さは多岐に渡っていて、先日読み進めたティモシー・モートンの書籍の言葉で言えば、これは地球温暖化の問題と同じく、「超対象(ハイパーオブジェクト)」と括られる問題だと思った。

今回のコロナの1件からも垣間見えたように、予測不可能なウイルスが蔓延することや、異常気象による生態系の危機的な変化を見ていると、超対象としての巨大で複雑で目には見えない問題が一気に人類に襲いかかってくるかもしれない。ほんのわずかなかけ違いが、バタフライ効果によって巨大な問題につながり、それが雪崩的に地球全体に影響を及ぼすということ。そして、それらの問題の複雑性は、日進月歩、人知を遥かに凌駕するものになってきていることを突きつけられたような思いにならざるを得なかった。フローニンゲン:2020/9/26(土) 20:08